

から、その神殿は130年ぶりに建て替えられたことになる。

白塚町の産神で祭神「スサノオ」またの名を「牛頭天王」といい、神事はヤマタノオロチの神話になぞらえて竹で作られた「やぶ」と呼ばれるものを大蛇に見立てたものである。「やぶ」は青年たちが民家を練りまわって疫病を「やぶ」に封じ込み、練が終わった後「やぶ」を海に流す神事で、疫病退散祈願の祭りである。また、氏子は夏の酷暑を無事に過ごそうと祈念し、先祖が清新で偉大な神の威力をお迎えした「神迎え」の古い信仰の名残で、350年前から行われているとのいい伝えがある。

第3節「やぶねり」神事の構造

筆者は2012年度、2013年度及び2014年度の「やぶねり」神事の参与調査を行った。本節では2012年度の「やぶねり」神事の内容を時系列に詳しく述べる。

(1) 準備段階の構造

①7月10日 宵祭り

「やぶねり」神事は毎年7月11日の夜に行われるが、神事の前日の夜に宵祭りが行われる。宵祭りは神事の準備として、また地域の人々に神事を知らせるためだと考えられる。宵祭りの夜に、八雲神社の境内に白塚の3つの地区宮町・旭町・日ノ出町(旧町名は山舗・中区・北出)の青年団が定められた場所に幟を立て、神社境内の参道に屋形や提灯を飾りつける。夕刻になると神社周辺の道沿いには露店が並び、白塚町の人々は夕食後に宮参りをする。宵祭りの露店はワタ飴作り・金魚吊り・たこ焼き・牛串焼きなど飲食店と娯楽店全部で17個の屋台がある。宵祭りの日に地域の住民は家族を連れて八雲神社の前の屋台を行き来しながら、祭りを楽しむ。

ア 夜7時に「やぶねり」神事の宵祭りが始まる。各地区の青年団はそれぞれの集会所やヤドに集結し、道中「伊勢音頭」を歌いながら神社へお参り始める(写真3-1)。3つの地区の青年団の青年は集会所あるいはヤドでお酒を飲んでから、順番に神社へ参拝しに行く。2012年度の「やぶねり」神事では、各青年団の参拝順序は宮町、旭町、日ノ出町という順番であった。青年団の幹事は提灯を持ちながら、参拝するチームの先頭に歩き、ほかのメンバーの音頭として「伊勢音頭」を大声で歌う。各青年団はそれぞれ自分の地区が用意した祭りための衣服を着て酒の勢いで参拝に行く。彼らの歌声はほかの宵祭りの参加者の目線を引き寄せた。筆者は宵祭りの時に白塚八雲神社で青年団の参拝を待っていたところ、青年団の青年らの姿が見える前に、先に歌声が遠いところから聞こえてきた。

青年団が歌う「伊勢音頭」は古くから伊勢地方で伝わっている歌謡であり、地元の人によると昔、漁師が漁を出るときに船を漕ぎながら「伊勢音頭」を歌っていたという。現在、白塚地区では漁師が少なくなるとともに、地元の人には「伊勢音頭」を歌うチャンスも少なくなった。現在神社で祭祀儀礼を行う時だけ、全員で「伊勢音頭」を歌う。そのほか、子供だけ遊びの時に大人の様子を真似て「伊勢音頭」を歌う。現在、青年団の氏子の両親はほぼかつて漁師をしていた人である。ある氏子から、毎年「やぶねり」神事で「伊勢音頭」

を歌う時に、子供の時代にお父氏から「伊勢音頭」を覚えてもらった様子を思い出し、子供時代の記憶が喚起されるとの話聞いた⁽⁶⁾。

イ 19時30分に一番先に来る青年団は宮司に祓いを受ける。3つの青年団は順番で白塚八雲神社の宮司により祓いを受け、翌日の神事の成功と安全を祈願する。

青年団は宮司に祓いを受ける順番が事前に決められ、毎年順番が変わる。青年団は神社に着いてから、先ず拝礼して、その後宮司により祓いをうける。祓いを受けた氏子は「伊勢音頭」を大声で歌いながら、大股でゆっくりと神社の鳥居に出て、青年団の集合所に帰り翌日の神事の準備をする。

次に、2番目の青年団が祓いを受ける。1番目の青年団と同じく、青年団の幹事は提灯を持って先頭を歩き、伊勢音頭を歌いながら白塚八雲神社へ宮司の祓いを受けに行く。

ウ 夜8時45分頃に宵祭りが終る。最後の青年団が祓いを受け終わると、宵祭りが終ることになる。青年団の氏子らは集会所に戻り、翌日の神事の準備をする。

宵祭りの日には神社の外に露店が多く出ており、地域の子供を引き寄せている。神社の境内も普段の様子と違って、神事のための飾りをしている。神事の幟と提灯は神社の各所につけられている。鳥居、白塚八雲神社、境内社の霞浦神社の注連縄はすべて新しく作ったものに変えられる。また、鳥居の右側に高さ2メートルぐらいの棒で作られた棚が2つ置かれ、上に住民から奉納された提灯がつけられている(写真3-3)。神社の鳥居をくぐって、神社の境内に入ると境内社霞浦神社の鳥居の両側に「金比羅大神」と書かれている提灯が2つある。霞浦神社社殿のドアは普段閉まっているが、宵祭りの日と神事の当日だけ開き、奉納の木箱を霞浦神社の正殿の前に置くことにする。そのほか、宵祭りに八雲神社の境内で最も注目されるのは境内についている灯箱だと考えられる。これらの灯箱は高さ2メートルぐらいの柱についており、表にヤマタノオロチ退治、平治物語、大漁祈願などの画が書かれている(写真3-4)。参拝して来る人々は灯箱をくぐって、灯箱の絵を満喫しながら、神社の本殿へ参拝に行く。宵祭りには白塚八雲神社の各所に祭りの飾りがなされ、翌日の神事の準備をする様子が見える。

白塚八雲神社の宵祭りには大勢の人が参拝に来るため、夜5時から八雲神社へ通る道路は自動車が通れないように交通制限をしている。白塚老人会の氏子は道の交差する場所で交通管理を担当する。宵祭りのときに青年団は8時半ごろに参拝が終るため、露店は9時半ごろに販売を終了する。

宵祭りが終っても、宮司と神主の仕事はまだ終っていない。灯箱や提灯の片付けなど、翌日の神事のために神社の飾りを準備しておく。

②「やぶ」の製作と神事の準備

宵祭りの翌日は「やぶねり」神事の日になる。「やぶねり」神事は夜7時に始まる。午前中に「やぶ」の製作と神事の準備をする。

ア 午前5時に氏子は白塚山へ竹刈りに行く。「やぶねり」神事の準備段階の中で最も重要な段取りは「やぶ」の製作である。「やぶ」を製作する前に「やぶ」を作るための材料を用意する。「やぶ」を製作するためには竹、縄、ユリと神札が必要となる。そのうち、神札は毎年愛知県津島神社からもらう。午前中白塚の青年団の氏子は、白塚の山へ竹を刈

りに行く作業をする。竹は「やぶ」作製作業は始まる朝7時には用意されていなければならぬため、青年団の氏子は朝5時に八雲神社で集合してから軽トラックで山へ出発する。

7月盛夏の朝太陽がすでに昇ってきて、少し動いたらすぐ全身が汗だらけになる季節である。氏子らは暑い天気にもかかわらず、真剣に神事の準備をやり始める。近年青年団の人数は次第に減ってきているため、青年団のほかに、老人会の氏子も一緒に竹刈りの作業をするようになった。軽トラックに乗って白塚山の麓に着くと、氏子は鎌を持って山を登る。山道は大変歩きにくいので、目的地まで20分もかかる。「やぶ」を作るための竹は太さと長さが統一されるほうがよいため、氏子は適宜な竹を選択し、竹刈りの作業を始める。1頭の「やぶ」を作るには16本の竹が必要となる。また、子供が担ぐ「やぶ」を作るのは細くて短い竹が必要である。そのため、用途の違いによって太くて長い竹を16本とそれより細くて短い竹も同じ本数を刈る。1本の竹を刈るには3、4人が必要となる。32本の竹を刈るのには、30分ほどかかる。

イ 午前7時に「やぶ」を作製する作業が始まる。1頭の「やぶ」を作製するのは16本の竹が必要であり、そのうち「やぶ」の「頭」と「尾」の部分をそれぞれ8本の竹で作る。午前7時半、青年団の氏子は竹をまとめて、長老の指導の上で「やぶ」を作り始める。「やぶ」を作製することは神事の中で最も重要な段取りであり、参加する氏子全員の努力の結晶である。しかし、1年に1回だけの神事であるため、「やぶ」の作り方がなかなか覚えにくいと青年団の氏子は語ってくれた⁽⁷⁾。長老の指導がなくては、青年団の氏子だけでは「やぶ」を作れないのが現在神事の実態である。

では、「やぶ」はいったいどのように作られるのか、ここで氏子の話から「やぶ」の作り方の概要を述べる。

「やぶ」の製作は、先ず6本の竹を縄で繋げ、これを「やぶ」の「胴」と「尾」にする(写真3-5、3-6)。次に、「ヤマタノオロチ」の舌を象徴する8本のユリと愛知県津島神社からもらった神札を竹の上に載せ、ごぎを竹にかぶせる(写真3-7、3-8)。次に、荒縄で網を編み、「やぶ」に束ねる。最後に、竹の葉っぱを「やぶ」に差し入れ、特に「尾」のところにより多くの葉っぱを入れる(写真3-9)。以上が「やぶ」を作製する段取りである。一見簡単に作れると見えるが、実際に作ってみるとそう容易に作れるものではない。特に縄の編み方は複雑であり、長年漁をしていた漁師が一番詳しいそうである⁽⁸⁾。1頭の「やぶ」を作るには約2時間が必要であり、大人用と子供用2頭の「やぶ」を作るのに4時間を必要とする。完成した「やぶ」は白塚八雲神社の鳥居に吊り付け、夜の神事の時に鳥居から外してそれを担いで地区ごとに巡行する(写真3-10)。

ウ 午前11時5分に地区ごとの「やぶ」の製作が終わると、八雲神社の宮司より神事の参加者全員と「やぶ」も一緒に祓いを受ける。地区の疫病が「やぶ」に封じ入れられているため、「やぶ」と接触する氏子は祓いを受けて体を清めなければならないという⁽⁹⁾。祓いの後に昼食の時間になる。氏子はみな家に帰り、昼ごはんを食べてから午後に神事の準備活動が続ける。

エ 午後1時から「やぶ」の巡行順路の準備をする。午前中の「やぶ」の製作が終って、午後に「やぶ」の巡行順路の安全装置を準備する。「やぶねり」神事は荒っぽい神事として名高く、氏子が「やぶ」を担ぎ、酔っ払った「ヤマタノオロチ」を真似し、巡行順路で

練り歩く⁽¹⁰⁾。神事の安全性の配慮として、巡行順路に防護用の柵が設けられる(写真 3-11)。

「やぶ」の巡行順路は白塚八雲神社から伊勢湾までである。巡行順路の安全装置を準備する作業は大変時間がかかる。しかし、この準備作業をする氏子らに聞くと、みなずいぶん前から神事に期待する気持を持つようになり、神事を準備するのは普段の仕事から離れて自分の地域の集団活動に参加する機会だと話してくれた⁽¹¹⁾。また神事の観衆の安全のために、巡行のルートの上側に木棒で建てる安全柵が設置され、上に藁などが埋められる。

巡行のルートを準備する作業は本来青年団が担当するが、近年青年団の人数が減っているため青年団のメンバー以外で40代以上の氏子も一緒に準備するようになった。その中には津市出身であり現在津市以外の都市で勤務しており、ふるさとの祭祀儀礼のためにわざわざ会社から休暇を取って「やぶねり」神事の最初の準備から最後まで手伝う人も何人かいる。神事を準備することは時間がかかる作業のため、人数が多ければ多いほど作業が順調に進められる。「やぶねり」神事の準備活動から、白塚地域の高齢化と少子化が地域の祭祀行事に与える影響の大きさが見える。



(写真 3-1) 宵祭り



(写真 3-2) 宵祭りに神社の提灯



(写真 3-3) 祭りの飾り



(写真 3-4) 宵祭りの灯箱



(写真 3-5、3-6) 「やぶ」の製作



(写真 3-7) ユリと神札



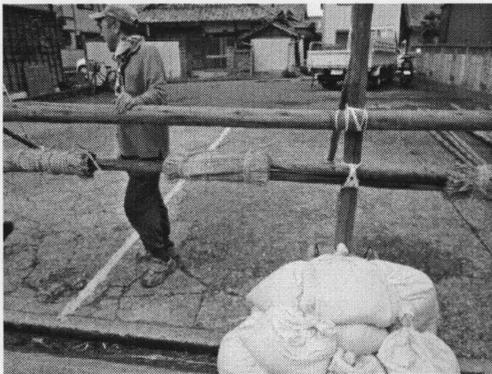
(写真 3-8) ごぎを竹にかぶせる



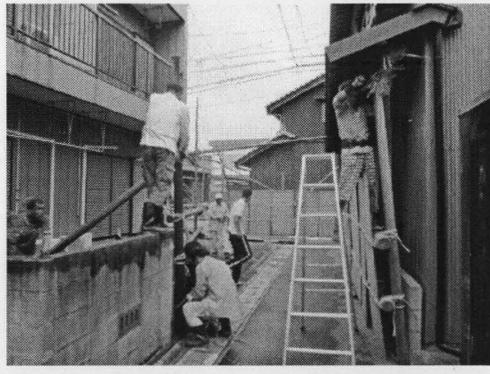
(写真 3-9) 「やぶ」が完成した様子



(写真 3-10) 「やぶ」を鳥居に吊り付ける



(写真 3-11) 道路に防護用の柵を設ける



(写真 3-12) 民家に柵を設ける様子

(2) 「やぶねり」神事の構造

ア やがて夕刻の7時半ごろに「やぶねり」神事が八雲神社で始まる。

まず、19時33分に宮司より参加者の全員に神事をする。青年団の神事を受ける順番は毎年変わる。2012年度の神事には宮町・旭町・日ノ出町の青年団という順番で祓いを受けた。2013年度には日ノ出町・旭町・宮町との順番であり、2014年度には2012年度と同じ順番であった。青年団の氏子らは30分ほどの時間差を設けて神事の服を着て、提灯を持ちながら八雲神社へ向かう。神事の前に青年団は、集合所やヤドで着替える(写真3-13、3-14)。着替えが終ると、氏子らは伊勢音頭の掛け声を唱えながら、神社境内の社殿へ出発する。宮司は八雲神社の社殿で神事を行い、氏子代表の4人が社殿で太鼓を叩く。

神事では、まず、宮司は社殿の前で神曲を唱え、氏神に地域の疫病退散を祈願するという⁽¹²⁾。次に、御神酒をお皿に入れ、青年団の氏子らに配って飲ませる(写真3-15)。その後、青年団の氏子の代表は御神酒を口に含み、ほかの氏子に吹きかける(写真3-16)。

イ 19時50分に青年団を筆頭に氏子地区への巡行が始まる。神事斎行の祭典の後に、御神酒と塩で清められた氏子らは、八雲神社の境内に置かれている「やぶ」を鳥居から外し、一斉に肩に担いで、「ヨイ、ヨイ、ヨイ」の掛け声で先導提灯を持つ青年団の幹事長の後について、伊勢音頭を唱えながら伊勢湾へ向かう。24歳の男性は厄年のため青年団の幹事長を担当するという⁽¹³⁾。

「やぶ」を担いで巡行する間に、見物人の飛び入りもあって練りが激しく、軒先の安全柵が壊れることもある。巡行が半ばになると祭りも最高潮に達し、折れた青竹の香りが一面に漂い勇壮な雰囲気が出される。伊勢湾へ向かう途中で氏子以外の住民たちは安全柵の外で神事を見ることができる。

ウ 20時20分に1番目の青年団が「やぶ」を担ぎ伊勢湾へ着く。やがて練りが落ち着くと、「やぶ」が道に面した海辺に運ばれ、津島神社の方向の海に流される。もともとは青竹に吊した先導提灯を持った青年氏子代表が沖に泳いでいってそれを立て、「やぶ」は頭部を北向きにして海に流したそうである。しかし、現在では「やぶ」を海に流すだけで、青年が泳がないようになった。こうして「やぶねり」神事はめでたく終了し、地元の氏子らは氏神の威光をもらってこの年も元気で活躍できるとされる。

エ 21時に最後の青年団が伊勢湾へ移動する。筆者が参加した2012年と2013年の「やぶねり」神事はそれぞれ旭町と日ノ出町が3つの青年団の中で最後に伊勢湾へ移動する青年団であった。

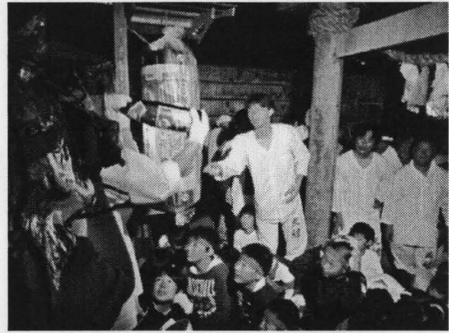
7月、伊勢湾に海からの涼しい風が吹き寄せて、神事でテンションが上がった氏子たちは海に入って喜び、はしゃいだ。夏に地域の人々が疫病にかからないように祈願する。



(写真 3-13、3-14) 集合所で神事の準備をしている青年団



(写真 3-15) 青年団の氏子が神酒を氏子にかける



(写真 3-16) 青年団が神酒を口に入れて子供に吹きかける



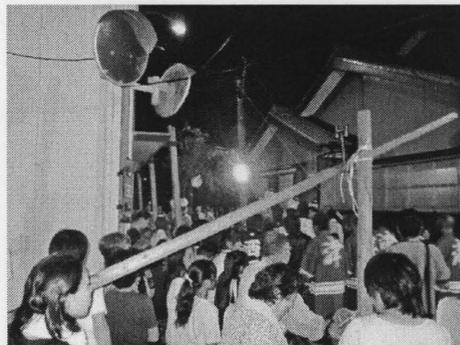
(写真 3-17) 子供の「やぶ」



(写真 3-18) 「やぶ」が暴れる様子



(写真 3-19) 青年団の「やぶ」



(写真 3-20) 見に来る周囲の住民

第4節 現在「やぶねり」神事の変化と担い手の捉えかた

(1) 祭祀組織の変化

「やぶねり」神事は祭祀組織が保存会ではなく、山舗青年団・中区青年団・北出青年団により行われる神事である。現地の氏子への聞き取り調査によると、「やぶねり」神事は戦後に地区の若者を中心として行われるようになった。特に、戦後日本青年団協議会の成立により、日本の都道府県から市町村まで地域の青年団が成立され、白塚地区の青年団もその時に成立した。青年団の成立により、「やぶねり」神事の祭祀組織は正式に青年団が担当するようになった。

しかし、20世紀70年代の高度経済成長期に入ると、地方に住む多くの若者は次々に大都市へ出稼ぎに行き、農村で生活する若者の人数が大幅に減少した。これは農村の祭祀活動にも波紋を投げかけた。村に属する青年団の人数が減ることによって神事の祭祀組織は当然の如く変化が起こった。名目的には青年団が神事の祭祀組織だということは変わっていないが、実際に神事の準備活動から神事の後片付けまで担当するのは青年団以外で50代以上の氏子を中心になっている。例えば、神事の準備活動の中で白塚山で竹を刈り切る作業は青年団の人数が足りないため、老人会の60代の氏子も参加するようになった。神事の準備活動は体力的にハードな作業である。それにもかかわらず、この準備活動に参加する老人会の氏子の姿には、神事の伝承と存続を願う強い熱意を感じた。

筆者が調査を行った2013年の「やぶねり」神事は、白塚山へ竹を刈りに行く氏子がほぼ40代以上の方で、かなり大変な作業であるため、参加する氏子の1人が「今の年まあいいんだけど、10年後だったら俺絶対無理だよ」と筆者にこれからの神事の準備活動を危惧する気持ちを語ってくれた。竹を刈る作業は「やぶねり」神事にかかる準備活動の最初の段階であり、最も体力が必要な段取りともいえる。一緒に竹を刈りに行った28歳の青年団の氏子は刈り取りの作業を終えると、大変疲れたといって家に休憩に帰った。若者でさえ体力的に耐えられない作業であるが、老人会の氏子らにとっては、かなり重労働であると痛感した。

次に、神事の祭祀組織の変化に関する氏子への聞き取り調査の内容を以下に述べる。

[事例1]2012年7月 白塚八雲神社で 氏子代表三村氏 男性 1938年生まれ

「この神事は疫病退散の神事で、また若者の元気を出せる神事だ。なので、若い人が参加しないと神事の意図がないと私はそう思った。昔は、みんな若い人だよ。元気だよ。あれはすごい。やっぱり若者がいるとにぎやかだ。神事も面白くなる」

[事例2]2012年7月 白塚八雲神社で 氏子正美氏 男性 1939年生まれ

「昔は若者が中心でやったよ。でも、今はみんなお年寄り仲間だ。若い人は名古屋か大阪の会社に行った。こっちの工場で働くのが面白くない。なので、神事はお年寄りがやるしかない。でも、わざわざ帰ってくる人もおる。やっぱり故郷の神事に参加したいなあ」

事例1と事例2から、現在「やぶねり」神事は老人会の氏子が担当していることが分かる。白塚地区における人口の構造が変化するとともに、「やぶねり」神事に参加する若い年齢層の氏子の人数は次第に減っていく。神事に参加するためにふるさとへ帰ってくる若い氏子はいるが、多いとはいえないほどの人数である。

(2) 「やぶ」の変化

第二次世界大戦の時に「やぶねり」神事が一時的に中止したことがある。神事が中止した後、白塚地区で疫病が流行し数多くの人が亡くなった。疫病神の神事を中止したのが原因で疫病が流行したのではないかという噂が地区に伝えられた。そのため、戦争が終わった直後に「やぶねり」神事が復活したという。しかし、戦後に復活した神事は戦前に比べ多くの変化があったそうである。さらに、昭和30年代津市が現代化するとともに、「やぶねり」神事に変化が生じた。筆者が八雲神社の氏子代表長谷川氏に行った聞き取り調査を通して、「やぶ」の変化を考察する。

まず、「やぶ」の数に変化があった。戦前「やぶ」を2つの地区に分けてそれぞれ2頭を作っていたが、戦後町村行政の改革で白塚が3つの地区に分けられたので、「やぶ」を3つの地区に分けて合わせて6頭の「やぶ」を作るようになった。その具体的な時期は検証できない。しかし、その変化は「やぶ」の数は「神事に影響がない」と判断したという長谷川氏の話から、地区行政の改革に対応した氏子の内発的行為による変化であることが分る。筆者が長谷川氏に「やぶ」の変化について聞き取り調査をしていたところ、隣に立っていた青年団の1人は長谷川氏の「やぶ」の変化の話しを聞いて、初めて昔の「やぶねり」の様子を知ったと語ってくれた。

次に、「やぶ」の作り方の変化である。戦前地区ごとにそれぞれの作り方で「やぶ」を作っていたため、「やぶ」の作り方が統一されていなかったという。「やぶ」の作り方は竹を8本・5本・3本に並べ頭の部分に津島神社のご神札と百合のつぼみ8本を封じ、芯に長い麻縄を通して、荒縄でしっかりと竹を結んで一抱え程度の束に仕上げる。ここまでの段取りが2つの地区は同じであったが、最後に竹の上にかぶせる荒縄の作り方が2つの地区では違っていた。しかし、戦後に「やぶ」を作る地区が3つになって、それをきっかけとして「やぶ」の作り方を統一しようとの声が上がってきた。その結果、地区ごとの特徴を失うかもしれないとの反対の意見もあったが、結局当時白塚の自治会は「やぶねり」神事を続けて伝承するために、地区の間にお互いに手伝えることができるように「やぶ」の作り方を統一することになった。現在、3つの地区で合計6本の「やぶ」を作り、その作り方はすべて同じである。「やぶ」の製作は地区ごとの漁師が担当し、荒縄の編み方が漁師の漁網を編む時の作りかたと一緒に、地区ごとの漁師が自分が馴染みの漁網の編み方で「やぶ」を作っていた。しかし、白塚の地場産業である漁業の衰退により、漁網を手作りする漁師は次第にいなくなり、かわりに店へ漁網を買う人が多くなった。そのため、漁網の作り方もいつのまにか分らなくなってきた。その影響により、「やぶ」の荒縄の編み方は2つからより簡単な1つの編み方に統一されてきた。「やぶ」の作り方の変化から地場産業が地域の祭祀儀礼にまで影響を与えているということが分る。

最後に、「やぶ」の巡行の変化である。昭和30年代以前には、神事で「やぶ」を担ぎ氏

子地区で巡行する際に、酔っ払った「やぶ」が民家まで入って練っていた。当時、民家の家はほとんど土間であった。氏子は「やぶ」が来る前に家をきれいに掃除し、「やぶ」が入ってくることを待っていた。しかし、昭和30年代以後、白塚地区では現代化が進み、住民の家は土間からたたみと床に変わった。住宅構造の変化により、「やぶ」はその後氏子の家に入らないことになった。

以上は現在までの「やぶねり」神事の変化に対するまとめである。地場産業、行政改革及住宅構造の変化により「やぶねり」神事に多くの変化があったことが分かった。

(3) 神話との関わりの変化

「やぶねり」神事を調査している間に、かつて氏子が神事でスサノオがヤマタノオロチを退治する神話(後にスサノオ神話と省略する)の場面を演じたことがあるという話を聞いた。現在氏子からもらった神事の資料に、「やぶねり」神事はスサノオ神話に由来したと書かれている。しかし、それ以外に、神事の神話との関わりを1つも見ることができない。かつて神事でスサノオ神話の場面を演じていたのに、なぜ今スサノオ神話を演じることを中止したのだろうか。筆者が行った氏子の正美氏への聞き取り調査を通して「やぶねり」神事とスサノオ神話との相関の現状を分析したい。

[事例3]2012年7月 白塚八雲神社で 氏子正美氏 男性 1939年生まれ

「俺もおやじから聞いた話だけど、戦前に「やぶねり」でスサノオがヤマタノオロチを退治する神話を夜の神事の前に演じていたのよ。午前中に「やぶ」の製作が終ってから、午後にその神話を演じて、「やぶ」の前に八つの茶碗を置いて、その茶碗にお酒を入れて、宮司氏が「やぶ」に向けて神事をし、また氏子は茶碗の中に入っているお酒を「やぶ」に注ぐ。まあ、簡単にその神話を演じるシーンだそうだよ」

正美氏の話から戦前「やぶねり」神事の当日の午後に、「やぶ」を使ってスサノオ神話を演じることがあったことが分かる。だが、現在これをやめる理由について正美氏はいつてくれなかった。また、筆者は白塚八雲神社の神職のA氏に神事と神話との関わりについて聞き取りを行った。その内容が以下のようなものである。

[事例4]2012年7月 白塚八雲神社で 神職A氏 男性 1937年生まれ

「この神事は確かにスサノオ神話からあった神事ですが、スサノオがここ八雲神社の氏神で、それと同時に疫病の神様でもあります。昔に「スサノオがヤマタノオロチを退治する」神話を神事の前に演じたという話があった。まあ、俺はここで宮司をやるのはただ12年前のことなので、具体的に昔には神話を演じたのかは知らないね。しかし、今はね、あなた去年も神事を見たでしょう、神話のこと全くないよね。まあ、この神事は神話からあったものといわれるんだけど。午前中に竹を刈り取りとか、「やぶ」を作るとか、いろいろ準備したでしょう。あれをするのは大変疲れるよ。また、夜に本番の神事があるから、もし午後また神事を演じるなら、しんどいよ。なので、今後も神話を演じることはやらないことになっちゃうのではないかなあと、俺は思うね」

以上、氏子への聞き取り調査から、現在神事でスサノオ神話を演じることを中止した原因が分った。神事に参加する氏子が高齢化していく影響のため、体力的にできる範囲で神事を行うしかできなくなった。その結果、神事の簡略化に至った。

(4) 伝承者の変化に対する捉えかた

現在まで「やぶねり」神事は世相の変化や種々の要因によって変化を辿りながらも、今なお盛んに続けられている。現在の神事の変化について、伝承者はどのように捉えているだろうか。以下、筆者は数名の伝承者への聞き取り調査を通してこの問題を明らかにする。

[事例 5] 2014年7月 白塚八雲神社で 氏子代表三村氏 1938年生まれ

筆者：あのう、私は1つ伺いたいことがあります。今「やぶねり」神事で「やぶ」の作り方と数とか、巡行のやり方とか、いろいろ変化がありましたよね。じゃ、三村さんはこの神事の伝承者としてどう現在の変化をどう思いますか。

三村氏：うん、確におっしゃったとおり、今いろいろ変わった。でも、われわれの考えは、これらの変化はそんなに大きな変化ではない。神事の基本の内容が変わるとかの変化ではいっさいない。やっぱりわれわれ小さい時から見た「やぶねり」とは変わっていない。

筆者：そうですか。つまり神事の変化は大きな変化ではなく、地域社会が現代化の発展により生じた変化と理解してもいいですか。

三村氏：そうです！今、全日本では少子化が大変だよ、ここもそう。子供がいなくなって、年寄りがどんどん増えてきて、神事をやるのも大変だ。竹刈りとか、「蛇」を作るとか、むかし、全部青年団の若い人がした。今みんな年寄りだから、「蛇」を作るのがなかなか難しくなってきた。だけど、やはり地域の神事だから、続けてやらないといかんわよ。なので、神事そのものが大きな変化がない。

筆者：じゃ、今でも氏子のみんなが神事の基本の部分を守って続けてやっていますね。

三村氏：そうです。まあ、神事の「原型」ともいえる、つまり神事の元々の形、変わったことがない。

筆者：じゃ、その「原型」は何を指していますか。

三村氏：それは、まあ、例えば、必ずこの日にやる、後は、この神社でやること、「八雲神社のことですか」と筆者が尋ねる）、そうです、八雲神社で行うこと、後、「やぶ」を手作りすること、最後に「やぶ」を伊勢湾に流すこと。これは、まあ、われわれ小さい時から見た「やぶねり」とはまったく変わったことがない。いまでも、そういうふう続けてやっている。

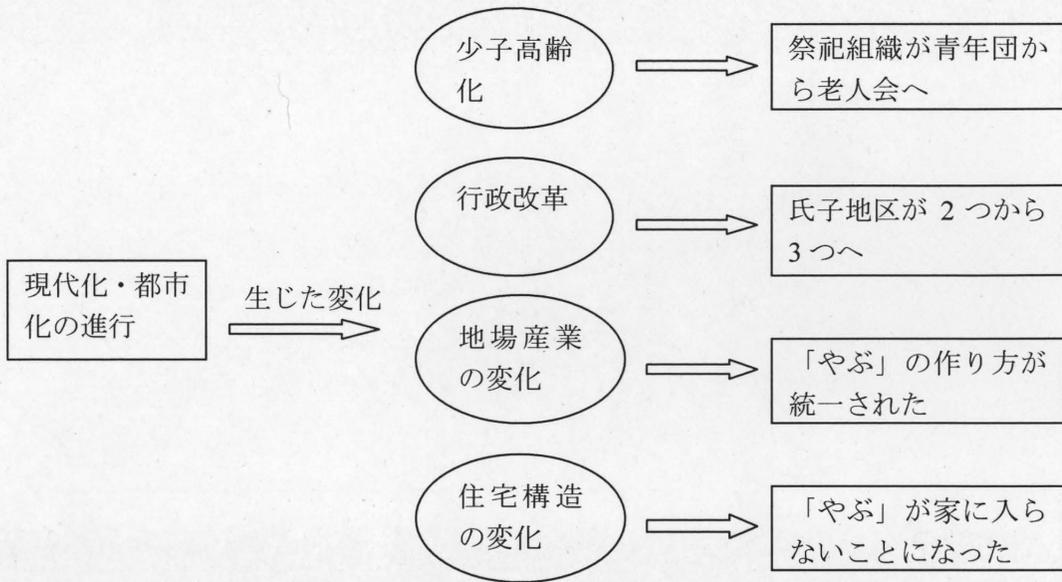
氏子代表三村氏への聞き取り調査を通して、神事の伝承者は戦後から「やぶねり」神事が起きた変化に対する捉えかたが分った。地域の「外部」の人から「やぶねり」神事は多くの変化を生じたが、神事の伝承者は神事の「原型」が変化していないため、神事が「変化していない」という考えを持っている。伝承者の視点から見る民俗文化の伝承について

著作を書いた足立重和の理論は本章でも通用することができると考える。足立は地域の民俗祭礼の保存について「祖先化」という概念を出した。地元住民は「伝いゲーム」のように、オリジナルなメッセージを誠実に確実に習得して受け継ぎ、次の人に伝えることができればそれでよい。だから、自分たちが今やっていることは、その前も、その前の前も同じことであるはずだから、伝えられた内容がどうであれ、この行為の同一性が保存である。地元住民は自分たちの「祖先」が確実に実在することを示しさえすればよいと、足立はこのように「祖先化」の概念を解釈した（足立 2010 : 78）。また、「祖先化」とは、「唯一の歴史」という時間軸を前提に過去に遡って祖先たちを配置し、それらの実在性を示しつつ、今存在する物事は自分たちが祖先たちと「同じこと」をして受け継いだとの結論をつけた。

三村氏への聞き取り調査から見ると、伝承者の「やぶねり」神事の変化に対する捉えかたは足立の「祖先化」の理論と似ている部分があると考えられる。

上記の考察から、「やぶねり」神事の変化は、祭祀組織の変化、「やぶ」の変化とスサノオ神話との関わりの変化を含んでいることが分かった。では、これらの変化の原因は何だろうか。図 3-1 から見てみよう。図 3-1 が示すように、白塚地区の人口が少子高齢化していく影響により、「やぶねり」神事の祭祀組織は青年団から老人会に変化した。また、かつて神事でスサノオ神話の場面を演じていたが、現在中止された。そのほか、戦後白塚地区村町行政のため、氏子地区は 2 つから現在の 3 つに変わり、「やぶ」も 4 頭から 6 頭に変化した。氏子地区の変化とともに、「やぶ」の数も変わった。かつて白塚地区の地場産業であった漁業の衰退により、漁網を作る人は少なくなった。その影響で、漁網と同じ作り方の「やぶ」を編む人もいなくなった。結局、氏子地区は 3 つになったと同時に、「やぶ」の作り方も統一された。かつて氏子地区それぞれ違う作り方で「やぶ」を作っていたが、現在すべて同じの方法で「やぶ」を作るようになった。最後に、昭和 30 年代以後白塚地区は住民の家が土間からたたみと床へ変わりつつある。住宅構造の変化は「やぶ」の巡行様式に影響を与えた。かつて「やぶ」が住民の氏子の家に入ったが、現在入らないことになった。以上、「やぶねり」神事が変化する原因は、人口の少子高齢化、地区行政の改革、地場産業の変化、住宅構造の変化であると考えられる。これらの要素の変化は地域社会における現代化の進行と同時に生じた変化だと考えられる。また、地域の祭祀儀礼が行われる「外部」の社会環境といえる。

図 3-1 「やぶねり」神事の構造の変化



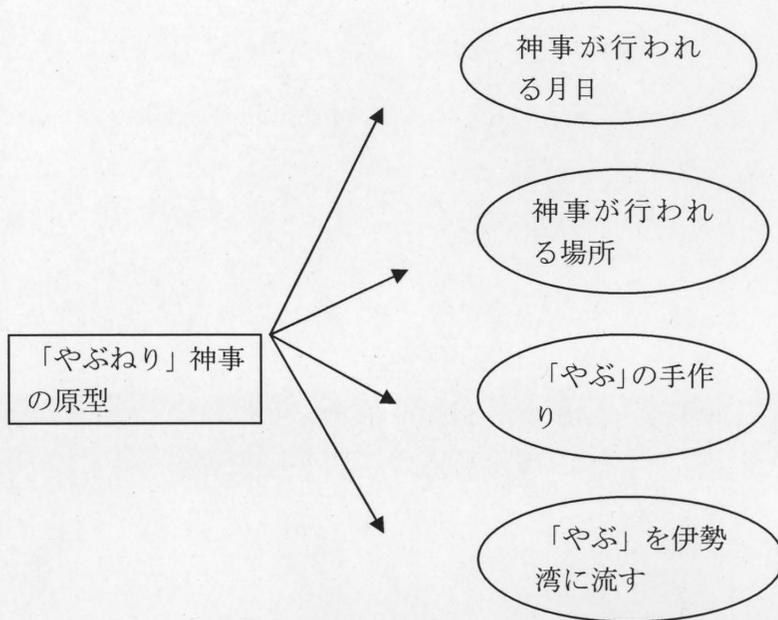
氏子三村氏は現在の「やぶねり」神事の変化は大きな変化ではないとの考え方を出した。また、「大きな変化」の意味に対し、「原型」を失う変化ではないと三村氏は解釈した。つまり、伝承者の視点から見ると、神事が行われる「外部」の社会環境の発展により生じた変化は「大きな変化」ではない。従来、研究者側は社会環境の変化により祭祀行事の変化が行事の本来の原貌を失ったと批判した。ここから、研究者と伝承者が持っている現代社会における祭祀行事の「変化」に対する考えの基準が大きく違っていることがはっきり分かる。伝承者の視点から見ると、かつての祭祀行事は祖先の時代の社会環境の中にあった行事であり、その時代に相応しいものである。そのため、現在の祭祀行事は必ず現代の社会環境に相応しい。いい換えれば、足立の「祖先化」理論と同じように、現代社会の祭祀行事の伝承者は、歴史の時間軸を過去に遡って、今存在する物事が祖先たちと「同じこと」をして受け継いだ。この「同じこと」は三村氏がいった神事の「原型」だと考える。

また、足立は郡上八幡の郡上おどりを事例とし、「外部」から変化された現在の郡上おどりが伝承者から見ると「昔と同じだ」という伝承者の認識を「本質化」という概念を提唱する。足立の「本質化」の理論は「祖先化」の理論の上で伝承者の立場からまとめたものである。足立の解釈により、本質化は「共時的に存在する・別個と考えられうる物事を「唯一の歴史」という時間軸に基づいて通時的に並べ直しながら、それらから1つの共通性を見いだす推論」である。

足立がいう「1つの共通性」は「やぶねり」神事の場合では伝承者がいう神事の「原型」とは同じなものだと考える。図 3-2 が示すように、「やぶねり」神事の「原型」は現在の伝承者が祖先と違っている時代においても、「外部」の社会環境に影響を与えてほしくないものだと考えている。そのため、神事の「原型」は祖先の時代からそのまま残された要素であり、変化していない部分である。「やぶねり」神事の「原型」は神事が毎年 7 月 11 日に行われること、白塚八雲神社で行われること、「やぶ」を手作りすること及び神事の最後に「やぶ」を伊勢湾に流すことである。これら神事の「原型」さえ保っていれば、神

事は「変化していない」と氏子らは考えている。

図 3-2 伝承者による「やぶねり」神事の「原型」



「やぶねり」神事の伝承者は祖先から伝えられてきた「原型」を、そのまま保存すべきだという意識を強く持っている。以下、神事の月日の保存ということについての氏子の聞き取り調査から、伝承者がいかに祖先から伝わってきた「原型」を守っているのを見てみよう。

現在、祭りに参加する氏子の勤務状況から、祭りの日を平日から土日などの休日へ変更するケースが多く見られる。しかし、「やぶねり」神事は昔からそのまま7月11日に行うことを守っている。神事の日を休日に変更すれば、もっと多くの参加者が参加するようになるかもしれないが、「やぶねり」神事の伝承者は神事の日を変更せずにそのままにして続けている。伝承者らは神事を7月11日に続けて行うことに関して、次のように述べている。

[事例 6] 2013年7月 白塚八雲神社で 氏子長谷川氏 男性 1940年生まれ

「やぶねり」はわれわれ小さい時からずっと見ていた神事だ。(中略) 神事をおやじから教えてもらった。その日にちは、変わってはいけないんだ。」

[事例 7] 2013年7月 白塚八雲神社で 氏子Y・M 男性 70後半

「やぶねり」はあくまでもこの地域の神事だ。神事は何かというと、神様を祀ること。この日に神様を丁寧に迎えて、また送るんだ。だから、この日はわれわれ勝手に自分の都合で変えることができない。それは神様が決めた日。そうしないと神様が怒るよ」

以上が、氏子の視点から神事が行われる日を変更することができない理由である。伝承者の考えによると、「やぶねり」神事は白塚地区の氏神を祭るために行われる神事であり、神事が行われる月日が重要な部分であり、変えることができないものである。つまり、神事が行われる月日は祖先から伝えられてきた「原型」の1つであり、「外部」の社会環境がいかに関わったとしても、これが変えてはいけない要素である。

このように、「やぶねり」神事の伝承者は白塚地区の「祖先」から伝えられてきた神事の「原型」を守って神事を伝承し続けている。現代社会における「やぶねり」神事の変化は決して伝統文化の再構築ではなく、伝承者がいかに神事を現代社会に適応させながら伝承する努力を反映した。われわれ「外部」から地域の祭祀儀礼を見る研究者は、すぐ現代化による変化が目に入り、伝統文化を「そのまま保存されていない」ことに批判の声をあげてきた。しかし、伝承者の視点から見ると、地域の祭祀儀礼はそもそも「見せるものではない」ので、「内部」からの変化さえなければ、儀礼自体が「変化していない」といえる。また、伝承者はあえて「祖先」から伝えられてきた神事を「そのままにする」という考えを堅持するところを見せた。

以上、「やぶねり」神事の伝承者が現代社会における神事の変化に対する捉えかたから見ると、以下のことがいえる。外部の環境により余儀なく起こった変化は、祭祀儀礼を伝承する過程の中で必ず出てくるものであり、その変化も祭祀儀礼の一部分と認めるべきである。しかし、注意しなければならないのは「祖先」から伝えられてきた祭祀儀礼の「原型」を変えてはいけないことである。その「原型」を伝承すれば、「祖先」と違った社会環境になっても祖先たちと「同じこと」をして受け継いだと認められる。

小括

本章は三重県津市白塚地区の「やぶねり」神事を事例として、伝承者の視点から見る現代社会における地域の祭祀儀礼の変化について考察した。

まず、現代社会における祭祀儀礼の変化の問題についてである。350年余りの歴史を持っている三重県津市白塚地区八雲神社の「やぶねり」神事は現在、構造の面において多くの変化があった。昭和30年代以後、白塚地区では人口の少子高齢化という現象が深刻な状況になっている。その影響により、「やぶねり」神事の祭祀組織は青年団から老人会へ変化している。また、かつて神事で神話の由来であるスサノオ神話の場面を演じていたが、現在神事に参加する若い氏子の人数が足りないため、神話を演じることは中止された。さらに、戦後白塚地区の町村行政の改革により、氏子地区は2つから3つになった。したがって、「やぶ」の数量も4頭から6頭になった。そのほか、昭和30年代以後、白塚地区の地場産業である漁業は次第に衰退し、加工産業に勤める人が増えた。漁業の衰退は「やぶねり」神事で最も重要な部分である「やぶ」を製作する作業に影響を与えた。かつて2つの氏子地区はそれぞれの作り方で「やぶ」を作っていたが、漁業の衰退により魚網の作り方が分からなくなり、魚網と同じ作り方の「やぶ」の製作の方法は統一されるようになった。最後に、白塚地区の住民の家は土間からたたみと床に変化したため、かつて神事の

巡行で「やぶ」が氏子の家まで入っていたが、現在「やぶ」が入らないことになった。

このように、白塚地区における人口の少子高齢化、町村行政の改革、地場産業の衰退、住宅構造の変化により「やぶねり」神事の構造に多くの変化が生じた。これら神事が変化する原因は、地域の「外部」の社会環境が現代化・都市化するとともに生じた結果だと考える。従来、地域社会の現代化・都市化により祭祀儀礼に生じた変化に対し、研究者側には批判的な意見が存在した。しかし、本章では「やぶねり」神事を担う氏子への聞き取り調査を通して、伝承者が研究者とは異なる認識を持っていることが分かった。伝承者の視点から見ると、祭祀儀礼に生じた変化は、現代社会に適応するための変化である。そのため、これらの変化は祖先から伝えられてきた儀礼の「原型」を壊した変化ではない。氏子は今でも祖先の時代と同じ儀礼を伝承している。このように、儀礼の「原型」さえ保っていれば、儀礼が「変化していない」という認識を伝承者は持っている。

足立重和は、①「唯一の歴史」という時間軸の存在を前提にして、「祖先」を配置し、それらの実在性を示しつつ、いま存在するものごととは伝承者らが祖先たちと「同じこと」をして受け継いだものだとする「祖先化」と、②共時的に存在する・別個と考えられうる物事を通時的に並べ直しながら、それらから1つの共通性を見だし「本質化」を提唱した。足立重和の「祖先化」と「本質化」の理論で本章の論説を説明することができる。「やぶねり」神事を担う氏子の視点から見ると、現在の神事は祖先の時代の神事と同じ「本質」を持っているため、神事が「変化していない」である。つまり、現代の社会環境を祖先の時代に並べ直すと、そこから2つ時代の「やぶねり」神事は1つの共通の「本質」を持っている。それは「やぶねり」神事の「原型」である。「やぶねり」神事の「原型」は、いわゆる氏子が述べたように、神事が行われる月日、神事の場所、疫病退散の要素及び「やぶ」の巡行である。

現代社会における地域の祭祀儀礼は昔のままに保存されているだろうか。この問題を考える前に、どのように地域の祭祀儀礼を保存し、伝承するべきだろう、という問題を解決しなければならない。本章の分析を通して、研究者側と祭祀儀礼の伝承者側は、伝統文化の伝承という問題に異なる考え方を持っている場合があるということが分かった。筆者の考えでは、地域の祭祀儀礼の主体はあくまでも伝承者である。伝承者は自分の地域の祭祀儀礼を行って、またそれを後の世代へ続けていく。そのため、現代社会における祭祀儀礼を研究する際に、伝承者側の視点で地域の祭祀儀礼の変化を考察することは重要な意義を持っているのではないだろうか。

注

- (1) 筆者は白塚八雲神社を調査に行ったときに、すべて近鉄名古屋線の高田本山駅から降りて徒歩で行くルートで利用した。
- (2) 『津市史』第4巻299ページに載せる昭和36(1961)年10月1日の人口データによる。
- (3) 津市平成18(2006)年国勢調査データによる。
- (4) 「須佐之男命」は「スサノオ」の漢字の表記である。白塚神社ご祭神の書き方はすべ

て白塚八雲神社の社殿に保存されている神札に書いているものによる。

- (5) 2006年町内会が編集する「八雲神社社報」による。
- (6) 2012年7月に筆者が行った、山鋪青年団の氏子に対する聞き取り調査による。
- (7) 2013年7月に筆者が行った、日ノ出地区の長老に対する聞き取り調査による。
- (8) 神事のための縄が地区の長老が作っているときに容易に身につけるものだと感じられるが、筆者は実際に地区の長老にその作り方を教えていただいてから自分で作ってみると、やはり間違ったり忘れていたりことがあって、長老の指導がないと自分たちには作れないという声が、ほかの若い氏子たちからも聞いた。
- (9) 2013年7月に筆者が行った、宮司と神主に対する聞き取り調査による。
- (10) 2012年7月に筆者が行った、神事のために道路の準備をしていた氏子正美氏に対する聞き取り調査による。正美氏は現在81歳で「やぶねり」神事に20年以上参加したことがあるという。
- (11) 2012年7月に筆者が行った、写真3-12の中の巡行ルート of 準備をしている氏子たちに対する聞き取り調査による。
- (12) 2012年7月11日に「やぶねり」神事の当日に筆者が行った、宮司A氏に対する聞き取り調査による。
- (13) 2013年7月に筆者が行った、日ノ出地区の長老に対する聞き取り調査による。

第3章 地域活性化事業の推進と祭祀儀礼の変化 —茨城県行方市麻生町天王崎「馬出し祭り」を事例として—

第1節 問題提起と本章の目的

(1) 問題提起

1980年代高度経済成長期後、現代化や都市化による農村地方の人口の少子化、過疎化の問題は深刻になり地域の祭祀儀礼にも影響を与えている。祭祀儀礼は担い手の高齢化や少子化にともなう後継者不足の問題により、祭祀儀礼の伝承と存続が極めて危うくなっている。民間文化の伝承の危機的状況に対応して、1980年代から地域活性化へ取り組みが推進されるようになった。この政策が提唱しているのは、住民が主導権を握り、自ら見出した地域固有の資源を核にして地域アイデンティティを確立しようとする、住民参加の地域づくりである。この施策的対応として、それまでの集落道路や排水、農村公園の整備といった生活環境重視型の農村環境整備事業に代わり、多様な地域資源を活用した農村活性化型の環境整備事業が、1990年代から展開されることとなった(重岡 1995)。戦後、日本農村の農村環境整備は、初期の食糧増産型環境整備、農業基盤整備型整備を経て、生活環境重視型農村環境整備から、農村活性化型農村環境整備の事業へ進むようになった。民俗芸能はこの環境整備事業の中で地域活性化資源としてクローズアップされるようになってきたものである。民俗芸能が1990年代から地域活性化資源として開発されると同時に、民間祭祀儀礼も環境整備事業の視野に入れられた。

地域活性化事業を推進する目的は、地域資源を再評価し、何らかの形で活用を図ることである。そのため、地域活性化事業の一環として扱われる際に、祭祀儀礼は何らかの変化をもたらさだろうか。また、現代社会における地域の祭祀儀礼の伝承の問題を考える際に、地域活性化事業との関係をどのように捉えればよだろうか。

本章は以上の問題を念頭に置きながら分析を展開する。

(2) 本章の目的

本章では、スサノオ神話に由来する疫病退散儀礼の中で、茨城県行方市麻生町天王崎八坂神社「馬出し祭り」を研究対象とし、疫病退散儀礼として「馬出し祭り」の特徴を分析する。また、現在「馬出し祭り」の変化を考察し、さらに伝承者が儀礼の変化に対する捉えかたから、地域活性化事業の推進と祭祀儀礼の変化との関係を明らかにしたい。

分析手順としては、先ず、現在の祭りの構造に注目しつつ、祭りの祭祀組織と伝承活動の現状を整理する。「馬出し祭り」は宵祭りと当日の祭りの2日間に行われ、麻生地区1年間最大の祭祀儀礼である。宵祭りで地域の住民に祭りの開催を知らせ、当日の祭りの参加を求める。また、宵祭りと祭りの当日には氏子は2日間で5色の吹き流しで飾られる馬を

引いて氏子地区で巡行する。「馬出し祭り」の運営は保存会と当屋及び組合が主に担当される。保存会は馬に関わる事項を担当する。その一方、祭り全体の段取りは当屋と当屋の組合が担当する。本章では、先ず筆者が2012年から2014年まで「馬出し祭り」に対する現地調査に基づき、祭りの構造を述べる。次に、「馬出し祭り」の疫病退散儀礼としての特徴を分析し、スサノオ神話との関連を考察する。「馬出し祭り」で最も注目されているのが馬の登場である。ここで馬の要素を取り上げ、疫病退散儀礼との関連を分析する。

次に、現地の伝承者への聞き取り調査により、現在の「馬出し祭り」の変化及び伝承者が祭祀儀礼の変化に対する考えを探る。昭和30年代以後、麻生地区の若世代の人は次々と大都市へ出稼ぎに行き、地域の過疎化・高齢化の状況が深刻になってきた。その影響で、「馬出し祭り」に参加する青年団の人数は急に減っていき、祭りの規模も縮小されている。また、90年代以来、行方市は地域活性化事業を推進するため、「馬出し祭り」がその一環として扱われている。地域活性化事業に巻き込まれる祭祀儀礼はどのような影響を与えられているのか。本節で「馬出し祭り」の事例を通し、分析を展開する。

最後に、地域活性化事業として扱われる祭祀儀礼に対し、氏子代表者と一般の氏子、また「外部の人」である祭りを見に来る写真愛好家は、どのような認識を持っているだろうか。本章では聞き取り調査を通して、この問題を明らかにする。

第2節 研究対象の背景

(1) 調査地の背景

行方市は茨城県東南部の鹿行地域に位置し、霞ヶ浦に挟まれ懐に北浦を抱えている豊かな水に囲まれている。行方地元では霞ヶ浦の東側を「北浦」、西側を「霞ヶ浦」と呼んでいる。行方市は北浦と霞ヶ浦に挟まれたところである。現在、麻草の一本もない調査地の麻生町は「常陸風土記」によると、「麻生の里」と呼ばれ大きな麻が群生していた。その昔、「麻生の里」の南にある「香澄の里」は景行天皇が、印波の鳥見の丘（千葉県印旛沼周辺）からはるか東の方を眺められた時海（霞ヶ浦）には青波が漂い、陸には霞がたなびいているといったことから、霞の郷（香澄の里）と呼ばれたといわれている。天王崎は、「香澄の里」の西から霞ヶ浦の中に突き出た大きな洲で、この洲の上に立って北を眺めると遠くに「新治の国」の筑波の山が見えたので、「新治の洲」と名づけられたといわれる（茨城県史編集委員会 1972）。

麻生町は、行方5か町村の中心にあり、町側の霞ヶ浦と東側の北浦の2つの湖に挟まれた台地に位置し、しかもその両方の湖岸を含む町域を持っている。昭和30(1955)年3月31日、旧麻生町と霞ヶ浦に面した西側地区、行方・小高両村および北浦に面した大和・太田両村の5か町村の合併によって成立した。その中核となった旧麻生町は、行方郡役所の所在地であり、警察署、区検査庁、簡易裁判所、税務署などのほか麻生中学校（旧制）もあ

り、近代 100 年を通じて、行方郡のみでなく県の南東部の、行政・経済・文教の中心地であった。

現在の麻生町は、総面積約 56 平方キロメートル、田、畑、山林がそれぞれほぼ等しく 14～16 平方キロメートルの広さを占める。田は、台地の東西の谷あい、溜地を利用して開かれた谷田と、西側の単調な湖岸線にそって干拓拡大された部分、及び西浦西岸に深く入り込む小湾を干拓して広がった部分などからなる。

(2) 「馬出し」祭りの背景

麻生「馬出し祭り」は平成 2 (1990) 年 11 月 19 日に、町指定無形民俗文化財になっている。麻生町の最大の祭りで、毎年 7 月の最終土曜日・日曜日に行われる。約 300 年の歴史があるこの祭りは、麻生藩の保護を受け、旧藩政当時は、毎年旧暦 6 月 14 日、15 日の両日に藩主を中心として祭礼を盛大に執り行っていたが、廃藩後は、古宿、新田両集落が中心となり麻生「馬出し祭り」として、祭礼を行っている。

麻生で出版された『麻生の文化』2001 年 23 号に、「馬出し祭り」の由来について 1 つの記載がある。それは、大蛇退治に倣い当麻生藩主新莊が近江より当麻生藩に国換えとなり、藩の総鎮守として藩主自ら供奉して領内二十か村の役員を集めて祭りをした。この祭事は戦国の武将として一朝有事の時も十分に役立てるように戦場にたつて足軽の馬を引くためにも、また、いざ戦場にたつて大軍の中にあつて馬が動じないための調教で、祭りの時に、馬を脅かせたりするのである(羽生 2001)。この由来より、いままで麻生ではスサノオがヤマタノオロチ退治神話は「馬出し祭り」の由来であるとのいい伝えられてきた。また氏子らもスサノオ神話が「馬出し祭り」の由来だと思っている。「馬出し祭り」で馬が「ヤマタノオロチ」の象徴と見なされ、また神輿が「スサノオ」の象徴と見なされている。祭りのクライマックスである馬と神輿の対決はスサノオがヤマタノオロチとの戦いと見なされ、結局スサノオがヤマタノオロチを退治し、地域の疫病を退散したと考えられる。

第 3 節 「馬出し祭り」の構造

「馬出し祭り」は行方市麻生町古宿と新田 2 つの地区の祭りであり、毎年 7 月最終土曜日と日曜日の 2 日に渡って行われる。「馬出し祭り」保存会と当屋及び組合は祭りの全体の進行を担当する。保存会は牧場から馬を借りたり、馬の巡行など馬に関わる事項を担当する。当屋と組合は祭りの段取り、氏子がそれぞれの役割の分担を担当する。古宿と新田地区は、現在それぞれ祭りのために 9 つの組合がある。1 つの組合はほぼ 6 軒から 9 軒の住民がいる。毎年「馬出し祭り」は 1 つの組合を選び、そのうちに 1 軒の家が当屋を担当する。選ばれた当屋の家は祭りの準備から開催まで祭りの全般を担当し、当屋と同じの組合の家では当屋と協力して、祭りの世話人を担当する。2014 年の「馬出し祭り」の当屋は永

峯利秀氏であり、同じの組合の氏子が永作清一郎氏、羽生均氏、羽生義光氏、永作賢司氏と永作則雄氏が祭りの世話人を担当し、当屋を協力する。

祭りの準備として、祭りの前週の日曜日に、当屋の家で注連縄おろしが行われる。同じ日に、天王崎八坂神社境内で御飯屋を建てる。「馬出し祭り」は7月最後の土曜日の宵祭りから始まる。

先ず、「馬出し祭り」の宵祭りから見てみよう。

(1) 宵祭りの構造

宵祭りは7月最終の土曜日に行われる。朝6時に、新田地区の集会所で新田旗竿立てを行う。それから、「馬出し祭り」保存会の氏子は馬を引いて、新田地区と古宿地区で巡行する。「馬出し祭り」で使う馬は盛装5色の吹き流しをたれ、頭と尻にそれぞれの飾りをつけ、尻には鈴をつける。保存会の氏子は盛装した馬を引いて、チリンチリンと音をたてながら一軒一軒の家を回り、「馬出し祭り」開催の時間を伝え、祭りを宣伝し、祭りの奉納金をもらう。巡行する保存会の氏子は遠いところからも祭りの開催が分かるために、馬の飾り物と同じ色の服を着る（写真4-2）。馬が訪れた民家は保存会の氏子に奉納金を渡し、マッチをつけ、1年間の家族の無病息災を祈る。宵祭りの1ヶ月前から、氏子らは「馬出し祭り」の宣伝ポスターを氏子地域各店に配り、店の目立つところに貼るようにしていた。7月の末の麻生は、1年で一番暑い時期である。巡行する氏子らは汗をかきながら一軒一軒回る（写真4-3）。氏子地区で巡行する途中に、祭りの稚児をお宅から八坂神社まで送る（写真4-4）。

保存会以外に、当屋と同じ組合の家は、天王崎八坂神社で宵祭りの準備をする。先ず、八坂神社の社殿から神輿を出す。大人が使う神輿と子供が使う神輿を殿内から出し、きれいに掃除し、正殿の前に置く。そして、八坂神社の鳥居の注連縄を新しく換え、神社境内の周りに祭りの提灯を飾る。そのほか、神社のすぐそばに飯屋を建てる。これは宵祭りの最後に、神輿を翌日の朝まで飯屋に置くためである。飯屋を建てるのは事前に用意したテントを張り、鋼管6本でテントを支え、中に照明器具をとりつけ、「八坂神社」と書かれた木坂をテントの真ん中に吊るす（写真4-5）。このように、八坂神社宵祭りの準備が終る。

宵祭りの午前中に、新田と古宿地区の子供会は、婦人会と一緒ににわか馬を引いて氏子地区へ巡行する。地区の子供らも馬出し祭りに参加するため、子供らが使うにわか馬が用意される。にわか馬は木と猪の毛で馬の形をまねて作られ、大きさは実際の馬の2分の1である。にわか馬の下に4輪がつけられ、子供らにはにわか馬につけた縄を引き、太鼓を叩きながら、氏子地域で巡行し、「馬出し祭り」を宣伝する（写真4-6）。にわか馬は祭りで使われる馬と同じく5色の吹流しで飾られる。

午後2時頃に、宵祭りが始まる。先ず、天王崎八坂神社の宮司により宵祭りの参加者に神事が行われる。神事は八坂神社の神殿で行い、参加者は祭りの氏子代表、麻生警察署代表、当屋代表、組合代表、稚児などである。神事は約15分間行われる。神事後、宮司は祭神の「真体」⁽¹⁾を本殿から出して誰にも見せないように袖に隠しながら神輿の中に置く（写

真4-7)。このように神様の魂が入ることで、神輿は祭神と一体になると考えられる。

神事が終わると、神輿と馬の対決が行われる。宵祭りは本番祭りとは比べ、馬と神輿が対決する時間は短く、一方、氏子地区での巡行の時間が長い。対決の前に氏子は馬に特別の飾りをする。神輿と対決する馬の飾りは巡行する際の飾りと違って、白色の布で馬の全身が包まれる(写真4-9)。赤色の布は馬を刺激させるため、神輿と対決する時、赤色を避けて白色の布で馬を飾るといふ⁽²⁾。また、対決では大変激しく動くので、氏子らは熱中症に用心しなければならない。そのため、対決に参加する氏子らは塩を口に少し入れ、体の塩分の流失をしないように保障する。そのほか、氏子らは御幣を一枚耳の後ろに挟み、馬にも1枚ずつ耳に挟む。対決を無事に行うことを祈る意味だそうである。地元の人はこの御幣を「ヒ」⁽³⁾と呼ぶ(写真4-10)。以上の準備が出来上がると、神輿と馬の対決が始まる。

神輿は2台あり、子供らが使う神輿と大人らが使う神輿に分けられている。最初に子供らは神輿を担いで馬と対決する。子供らは神輿を担ぎ、馬を神社の本殿前から鳥居まで追い出し、鳥居をくぐり神社の本殿まで戻る。大人が神輿を担ぎ馬と対決する様子を真似して子供らは、「わいしょ、わいしょ」の掛け声を唱え、笑いながら神輿を担いで馬を神社の本殿前から鳥居まで何回も追い出す(写真4-13)。子供らの神輿は大人らが使う神輿よりずいぶん小さいが、それでも子供にとっては大変な重さである。祭りに参加する子供は小学生の3年生の女子と男子である。暑い昼間に、子供らは両親からもらった氷棒を食べながら、にわか馬を楽しむ。子供らが恐らく祭りの意味を分かっているが、子供の参加により、にぎやかで楽しめる祭りになったのではないだろうか。

子供神輿の次に、大人らの神輿と馬の対決が始まる。氏子らは先に赤い紐で神輿を縛り、紐を手握って神輿を肩で担ぐ。1人の氏子が先頭に立ち、玉櫛を握って神輿の前進を指図する。ほかの氏子らは神輿を担ぎ、馬を追いかける。馬が驚いて鳥居のほうに逃げる。馬が驚き過ぎて、抑えられない場合があるため、神輿と馬が対決する参道は縄で囲まれ、そのなかで祭りが行われる。祭りを見に来る写真愛好家らは参道の外に立って祭りを見る。馬は何回も追われると興奮状態になって振りかえり、神輿を担ぐ氏子に向かって走る場合もある。そのため、馬と対決する時に、神輿を担ぐ氏子らは常に馬の状態を見ながら走りのスピードをコントロールする。馬のスピードに合わせて神輿を担ぎ、安全を確認する上で馬と対決することは、祭りを無事に行うために重要である。

宵祭りで馬と神輿の対決は十数回に行われる。前に述べたように、神輿と馬の対決は氏子にとっても馬にとっても非常に体力を必要とし、また、熱中症を防ぐために途中何回も休憩を入れて行われる。馬と神輿の対決は宵祭りのクライマックスであり、多くの写真愛好家は馬と神輿の対決が最もよく見えるために、八坂神社の鳥居でカメラを構え、宵祭りの素晴らしい瞬間を写真におさめる。

対決が終ってしばらく休憩が入り浜降りを行う。

2012年度の「馬出し祭り」の宵祭りの神輿は1千万円を掛けて新しく直したばかりのため、氏子らが相談をして2012年度から3年間は浜降りを行わず、代わりに神輿を霞ヶ浦の

岸辺に置くことが決められた。そのため、2012年度の浜降りは氏子らが神輿を八坂神社の境内から霞ヶ浦の岸辺に担いだり、5分間ほど岸辺に置き、また八坂神社に戻した(写真4-11)。浜降りには子供会も参加するので、子供会は子供らが使う神輿も八坂神社から霞ヶ浦の岸辺に担ぎ、しばらく置いてからまた八坂神社に戻した。

浜降りが終わってから、氏子は神輿を担ぎ、氏子地区古宿と新田への巡行が始まる。巡行の順路は天王崎八坂神社から出て、レストラン大湖前で10分間休憩をし、また中華料理店牡丹江飯店前で10分間休憩をしてから、三光院に着き30分間休憩をしてから、稚児宅に着き20分間休憩をして、霞ヶ浦湖畔を通して、当屋のお宅で食事をしてから、最後に天王崎八坂神社の仮屋まで戻す。神輿を仮屋に戻してから、宮司により氏子の全員に神事をす。神事が終わったら、宵祭りが終了となる。

宵祭りは終わったが、氏子らにとって祭りを楽しむ時間は始まったばかりである。婦人会は祭りを1日頑張った氏子らのために直会を準備し、みなビールを飲みながら宵祭りを楽しむ。

昼の宵祭りは終わったが、巡行するチームはまだ麻生地区を回り続けている。宵祭りは稚児が巡行する。稚児は氏子の中から5歳の男の子であり、馬に乗せて氏子地区を巡行する役目がある。筆者が調査した2012年度の「馬出し祭り」では氏子地区で5歳の男の子3人の中から1人を選び、祭りのための服装を着て馬に乗ると聞いた。氏子らの助けもあり、酷暑にもかかわらずおとなしく馬に乗って、ほかの氏子らと一緒に2時間も氏子町会を巡行していた(写真4-14)。

(2)「馬出し祭り」の構造

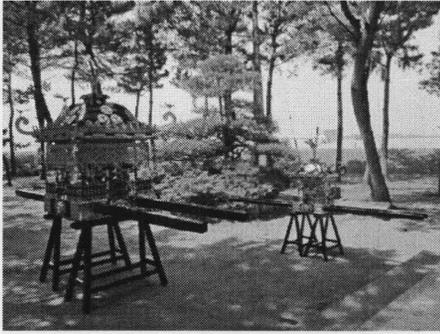
宵祭りの翌日に本番の祭りが行われる。午前中、宵祭りと同じく保存会は馬を引いて新田地地区と古宿地区で巡行する。午後2時頃、八坂神社の宮司が馬出し祭りの参加者に神事を行う。神事の最初に、宮司と参加者の代表者が八坂神社の神殿で修祓を行う。修祓の後、仮屋に移り、神事を行う(写真4-15、4-16)。祭りの参加者は宮司から玉串、赤飯、今年の新穀と、白い紙で作られた「ひ」をもらって、祭りが無事に終わることを祈る(写真4-17)。神事が終わると本番の「馬出し祭り」が始まる。

最初に、氏子は神社の神殿から鳥居まで神輿を担ぎ、鳥居を3回潜ってから、神社に戻り、それから馬と神輿との対決が始まる。第1回目の対決は、馬がまだ完全に驚いてはないので、激しくなかった。しかし、対決が進むと、馬がすこしずつ興奮してくるので、神輿と反対の方向に逃げるのではなく、神輿の正面を足で蹴る。馬を引導する氏子は力を尽くして馬を神輿の反対の方向に引いて行こうとするが、馬は神輿を蹴り続けている。このような時は、神輿を少し後ろに下げるしかない。猛暑で倒れてしまわないように、十分間休憩をとる。参加者は塩をそのまま口に入れて休憩する。休憩後、また馬を立たせて、神輿を担ぎながら、馬を鳥居のほうに追いかける。30分ぐらいして、馬も神輿を担ぐ氏子も動けなくなったときに、対決は終わる。

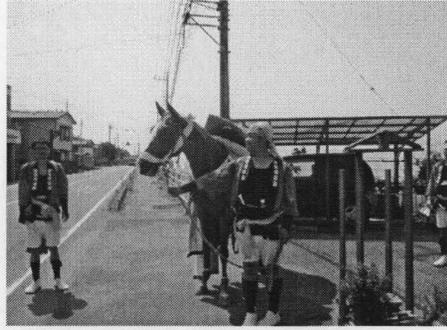
馬と神輿の対決が終ると、浜降りが行われる。宵祭りと同じく、氏子は神輿を霞ヶ浦の浜に置き、新木だけを担いで霞ヶ浦に入る(写真4-18)。7月の暑い日1日の祭りをを行うことに疲れた氏子は、霞ヶ浦で祓われるとともに、熱い体を癒し、祭りの最後を楽しむ。浜降りがほぼ30分で終ると、神木を担いで霞ヶ浦で祓われた氏子は、神輿を担ぎ八坂神社の神殿前に戻す。祭事委員長より2日間の祭りの労いと、簡単なあいさつがあり、最後は三本詰めで「馬出し祭り」は終了する。

(表 4-1) 2012 年 7 月 「馬出し祭り」 タイムスケジュール

時間	参加者	場所	内容
28 日 6 : 00	保存会、氏子	新田集会所	新田旗竿立て
28 日 7 : 00	保存会	新田、古宿	馬を引いて氏子地域へ巡行
28 日 14 : 03	氏子全員	八坂神社	八坂神社の正殿で宮司により祓いを受ける
28 日 14 : 55	氏子全員	八坂神社	神輿と馬の対決
28 日 15 : 50	氏子全員	霞ヶ浦の浜	神輿を霞ヶ浦の浜へ担ぐ
28 日 16 : 24	氏子全員	八坂神社	神輿を八坂神社へ戻す
28 日 15 : 40	氏子全員	新田、古宿	神輿を担ぎ、新田・古宿で巡行
28 日 16 : 00	氏子全員	レストラン 大湖前	休憩 10 分
28 日 16 : 30	氏子全員	牡丹江飯店 前	休憩 10 分
28 日 17 : 00	氏子全員	三光院	休憩 30 分
28 日 17 : 40	氏子全員	稚児宅	休憩 20 分
28 日 18 : 04	氏子全員	霞ヶ浦湖畔	休憩 5 分
28 日 18 : 32	氏子全員	当屋宅	休憩 10 分
28 日 19 : 03	氏子全員	八坂神社	神輿を担ぎ巡行することを終る
28 日 19 : 06	氏子全員	仮屋前	宮司により氏子全員に神事
28 日 19 : 24	氏子全員	仮屋前	神輿を仮屋に置き、宵祭りが終了
29 日 8 : 30	保存会	古宿、新田	馬を引いて氏子地区へ巡行
29 日 14 : 06	氏子全員	仮屋前	仮屋で宮司により神事を受ける
29 日 14 : 45	子供会	八坂神社	子供神輿を境内で担ぐ
29 日 15 : 52	氏子、保存会	八坂神社	神輿と馬の対決
29 日 15 : 26	氏子全員	八坂神社	神輿と馬の対決が終了
29 日 15 : 40	氏子全員	霞ヶ浦畔	神輿を霞ヶ浦の浜に置く
29 日 15 : 43	氏子	霞ヶ浦	神木を担ぎ霞ヶ浦に入る
29 日 16 : 17	氏子全員	八坂神社	神輿を担ぎ、八坂神社に戻す
29 日 16 : 30	氏子全員	八坂神社	神事が終了
30 日 6 : 04	当屋、組合	仮屋	新田仮屋解体
30 日 6 : 10	氏子、保存会	古宿集会所	古宿注連縄解体



(写真 4-1) 宵祭りの時の神輿



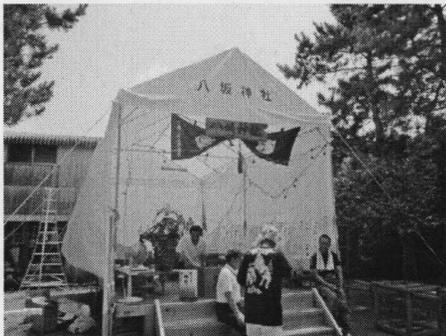
(写真 4-2) 馬を引いて巡行する



(写真 4-3) 巡行中の馬



(写真 4-4) 稚児迎え



(写真 4-5) 仮屋



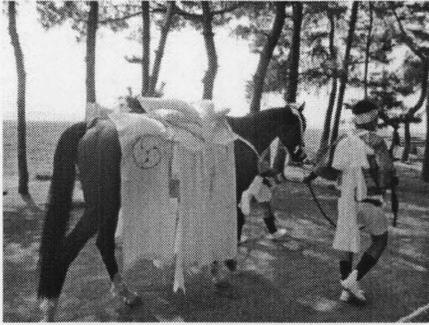
(写真 4-6) にわか馬



(写真 4-7) 祭神の「真体」を神輿に入れる



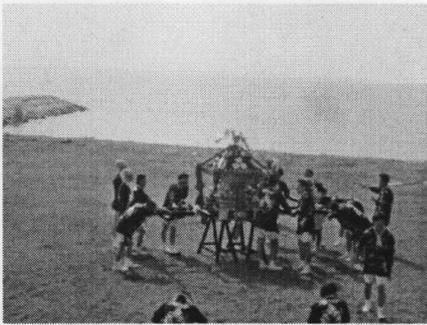
(写真 4-8) 氏子がマッチをつける



(写真 4-9) 神輿と対決する馬



(写真 4-10) 馬の耳に「ヒ」を挟む



(写真 4-11) 浜降り



(写真 4-12) 宵祭りで子供らが神輿を担ぐ



(写真 4-13) 神輿と馬の対決



(写真 4-14) 馬に乗せて巡行する稚児



(写真 4-15、4-16) 仮屋の前で神事

